

## 紀伊國屋ビルを受け継ぐこと

株式会社紀伊國屋書店 代表取締役会長兼社長 高井 昌史



紀伊國屋書店の歴史は、1927年創業者田辺茂一が新宿の地に売場面積38坪の木造2階建てのギャラリーを併設した書店を始めたことに端を発します。その後もこの創業の地が紀伊國屋書店の礎となり、社の発展を支えてきました。

1945年5月の戦災で当時の店舗は焼失しましたが、同年12月に焼け跡にバラックを建て書店を再開し、1947年には前川國男氏設計による木造2階建ての店舗を新築しました。それは、2階にギャラリーを併設した「戦後書店建築の白眉」と評価されたモダンな店舗でしたが、1960年代に入るとさらなる発展を目指して建て替えが計画されました。

設計は同じく前川國男氏。ル・コルビュジェに師事した日本モダニズム建築の旗手のひとりです。そして誕生したのが、現在の紀伊國屋ビルディング（1964年竣工 地上9階・地下2階／以下 紀伊國屋ビル）です。

書店は20坪程度が適正と考えられていた当時において、和書400坪、洋書80坪という売場面積は画期的でした。多品種少量商品の典型である書籍・雑誌を幅広く品揃えし多様化していくお客様のニーズに応えるために、世に先駆けて大型書店を誕生させたのです。

広い売場だけでなく、建築構造においても紀伊國屋ビルは斬新でした。前川國男氏は、「建物自体が町づくり」「渴ききった砂をかむような町に、何か一息つける場所を創りたい」との思いから、正面入り口に設けられた小広場から人々を建物の内部へと誘い込む「路地空間」を創出しました。

1927年の創業から戦災を経て、創業の地である東京・新宿に建てられた紀伊國屋ビルは、書店、劇場、画廊さらに物販、飲食のテナントを有する複合ビルとして、新宿における文化・芸術・情報の発信拠点となりました。

そして、次なる転機は2017年に訪れます。

紀伊國屋ビルが東京都選定歴史的建造物に選定されたのです。これは、歴史的な価値を有する建造物のうち景観上重要なものを、東京都景観条例に基づき東京都が選定するもので、選定にあたっては前述の前川國男氏の思いが結実した建築構造が高く評価されました。

私は、積み重ねてきた社業が、東京都の歴史の1ページに加えられたような気がして晴れがましさを感じるとともに、紀伊國屋書店はこれからも新宿の地に根ざし本を愛する多くのお客様に愛される書店でなければならないとの意を新たにしました。そして、歴史的建造物に選ばれた紀伊國屋ビルをこの先も守り維持し発展させていくことが、社に課せられた使命であると受け止め、そのために何をすべきかを考えたとき、取り組むべき課題が見えてきました。



紀伊國屋ビルディング（2021年2月撮影）

当社は、2019年7月に紀伊國屋ビル耐震補強工事を開始し、2021年2月から紀伊國屋ビル基幹設備更新工事、紀伊國屋ホールの改修工事に着手、同時に紀伊國屋ビルと新宿本店の改装工事を計画を

進めています。工事は清水建設株式会社が引き受けてくださいました。清水建設は、江戸時代から続く宮大工にルーツを持ち、浅草寺本堂の耐震改修など多くの社寺建築・伝統建築の改修の実績をお持ちで、日本の伝統と現代の技術を融合して後世に残る建物を作る姿勢は、紀伊國屋ビルをこの先も使い続けたいという当社の意向とまさに同じ方向を目指していると思います。

古くなったものを捨てるのではなく使い続けること。それもまた、企業が社会に対して果たすべき責任のひとつです。使い続けるためには、修理・修繕が必要ですし、新しい時代に適応するために改修も必要です。すなわち変化しない限り、維持することはできないのです。古くなったものに新たな手を加えて、さらなる価値を生み出すこと、それは過去を引き受け、未来に向かって次の世代へと文化をつないでいくことに他なりません。

私の恩師である朝倉孝吉先生（元・成蹊大学学長、元・東洋英和女学院大学学長）は江戸時代の経営理念の成立について次のようなことを述べられています。

---

貨幣経済が商業や都市と共に発展していく中で「町人社会」が形成されていくことで「経営」という概念が成立した。元禄時代に近づくにつれて、町人社会が活発な活動を見せる中で井原西鶴は多くの町人文学といわれるものを発表した。その中で商人の経営精神、現代にも通じる企業倫理ともいえるものを記している。西鶴は、『日本永代蔵』の中で寺院の僧をあざむいて不当な利益を得たものを「さてもすかぬ男」といい、「一たびはおもうままなりしが、元来すじなき分限むかしより浅ましくほろびて」と切り捨て、人倫の道にかなうものを称賛し道義に反する商売を厳しく非難している。

---

朝倉先生は、西鶴の言葉を引きながら商人の道としてとても大切なことを述べられています。正しい努力を続けていけば、必ず結果は出ると私は信じます。

私は、世の中のベースには常に本があると思っています。すべての文化は本に帰属します。文化が形をとり「知」として詰め込まれ、本を通じて、新たな世代へと人類の資産は引き継がれていくのです。紀伊國屋ビルを受け継ぎ次の世代に渡していくことは、単に歴史的建造物を維持させていくことではなく、時代にふさわしい文化・情報の発信拠点として紀伊國屋ビルを再生させ、そこで本を真摯に商い続けていくことで人類文化の発展に貢献することに他ならないと私は考えます。

紀伊國屋書店の理念は、いまでも昔も変わらず、そこにあるのです。

参考文献：『日本人が忘れてはいけないこと 国の礎は教育にあり』PHP研究所

朝倉孝吉 著・高井昌史 編

筆者のプロフィール

高井 昌史 （たかい まさし）

成蹊大学法学部卒業。

1971年、株式会社紀伊國屋書店入社。 <https://www.kinokuniya.co.jp/>

2008年代表取締役社長就任。2015年より会長を兼務。社外役員として出版健康保険組合理事長、一般社団法人成蹊会会長、学校法人成蹊学園理事、財団法人出版文化産業振興財団理事、財団法人図書館振興財団理事、東京都書店商業組合特任理事なども努める。

著書に『本の力』（PHP研究所）がある。